

鷹巣誠一作 「失恋」

中山浩の母 浩、早く起きなさい。学校に遅れるわよ！  
浩 は一い！ 分かったよ。うるさいな。今起きるから。  
母 まったく、このごろ夜遅くまで何やってるの？ 今度からもう起こさないわよ。  
浩 分かったよ。「今起きる」って言ってるだろ。  
ナレーション 中山浩は中学 2 年生。クリスチャンで、勉強もスポーツもできる大学生の兄、豊と 2 人兄弟で、これといった取り柄のない、ごく普通の中学生です。でも、その彼がこのごろちょっと様子がおかしいのです。  
浩 ごちそうさま。  
母 あら、もう食べないの？ どこか悪いんじゃないの？  
浩 なんでもないよ。ほっといて。  
効果音 (ドアを閉める音)  
浩(モノローグ) あ～あ、今日も数学の宿題か。学校へ行って勉強して、クラブをやって、帰ってくればフロに入って食事をして宿題をして寝る。休みの日だってなんとなく家でボケーツとしてただけだもんな。あ～あ、なんか寂しいな。今ごろ久美ちゃんは何をしてるんだろう。宿題やってるだろうな。部屋はきれいなんだろうな。ピアノ弾いてるかな。ピアノうまいもんな。今日はクラブで疲れてるだろうな。顔が見たいな。あのなんとも言えない笑顔が見たいな。彼女、好きな人がいるのかなあ。僕にもよく話しかけてくれるし、彼女と話していると楽しいし。でも彼女かわいいし、皆ともよくしゃべるからな。山下もあの子に目をつけてるみたいだしなあ。  
ナレーション おやおや、宿題をそっちのけで何をやってるのでしょうかね。目なんか焦点が合わなくて、恋患いですね。もう 12 時ですよ。早く宿題をやって寝ないと、また朝が起きられませんよ。  
浩(モノローグ) もう 12 時か…。もう宿題はやめだ。寝よう。  
ナレーション とうとう宿題もやらずに寝てしまいました。明日は大丈夫なのでしょうかね？  
浩 行ってきます。(モノローグ)あ～あ、また寝坊しちゃった。宿題はやってないし、最悪だ。遅れて入っていったら皆に笑われるだろうなあ。久美ちゃんにも笑われるだろうなあ。どうしよう。  
効果音 (始業のチャイム)  
先生 じゃあ出席番号順に昨日出しておいた宿題を答えてもらおう。  
浩(モノローグ) ああ、とうとうこの時が来てしまった。どうしよう。  
岡田久美子 (小声)浩君。  
浩 (小声)え？  
久美子 (小声)宿題やってないんでしょう。  
浩 (小声)うん。実は昨日夜遅くまで考え事しててね。  
久美子 (小声)そんなことだろうと思ったわ。浩君 16 番目でしょう。16 番目の答え、教えてあげるわ。ほら。  
浩 (小声)やった、ありがとう。恩に着るよ。(モノローグ)いやあ、やっぱり久美ちゃんは優しいなあ。それにきれいな髪、筋の通った鼻。かわいらしいえくぼ。かわいいなあ。  
久美子 (小声)浩君。浩君てば。

浩 (小声)え、ン、何？

久美子 (小声)あたしの顔に何か付いてる？ さっきからジロジロあたしのほうばかり見てるけど。

浩 (小声)いや別に。“窓の外のモミジがきれいだなあ”と思って見てたんだよ。

先生 こら、その 2 人、何をしゃべっているんだ？ しゃべりたいやつは外へ行ってしゃべってくれ。

生徒 (口々に冷やかす)

先生 こら、お前たちもうるさいぞ。次は高木だろ。早く黒板に問題をやりなさい。

ナレーション おやおや、浩君の恋患いは、どうやら重症のようですね。このままでは男がすたる！ 頑張れ浩君。

友達 おい、中山。一緒に帰ろうぜ。

浩 あ、ああ、いいよ。帰ろう。

友達 浩、お前、このごろおかしいぜ。さては恋をしたな？

浩 何を言ってるんだよ。くだらないことを。

友達 ほら見ろ、赤くなって。浩、相手は久美子だろ。岡田久美子。

浩 まさか、あんなやつ。

友達 そんなこと言っているのか？ どうだ、おれの勘は鋭いだろう。おれとおまえの仲じゃないか。正直に言っちゃえよ。

浩 だれにも言わないか？

友達 うん。

浩 本当に言わないか？

友達 しつこいなあ。おれが約束破ったことあるか？

浩 そうだなあ。お前なら言わないだろうな。

友達 そうそう。お前なかなか見る目があるぞ。早く、早く。

浩 実はな、お前の言うとおりになんだ。近ごろ岡田が気になって仕方がないんだ。どうしたらいいと思う？

友達 頼りないなあ。でも仕方がないか。何せお前にとっちゃ初めてのことだもんな。でもな、ここは一番勇気を出して言うしかないね。

浩 イヤだよ。どんな顔して言えばいいんだよ？ 恥ずかしくてそんなこと言えるかよ。

友達 お前 男だろ。それくらいの勇気出せよ。

浩 でも…。断られたらどうするんだよ。やっぱり今までどおりには話もできないぜ。気まずくなっちゃうよ。

友達 お前なあ、最初からそんな逃げ腰じゃ、うまくいくものもいなくなっちゃうぜ。

浩 でも…。

友達 口で言うのが恥ずかしかったら、手紙を書けばいいじゃないか。頑張れよ。応援してやるから。

浩 そうだな。手紙でも書かなあ。

友達 そうそう、その意気だ。頑張れよ。じゃあな。またあした。

浩 ああ、バイバイ。(モノローグ)手紙か…。そうだよな。あとのこと考えてたら、何もできないよな。当たって砕けろだ。よーし。

ナレーション どうやら浩君、一大決心をしたようです。早速家に帰って机に向かいまゝした。もちろん勉強

などするはずがありません。それはそれは熱〜いラブレターを書き始めたのです。

浩 (モノローグ) よーし、できたぞ。あれ、もう 11 時半か。まあいいや。今日は宿題もないし。あ〜あ、早く返事が来ないかなあ。あ、そうか、まだ手紙を出していないんだっけ。でも不安だなあ。断られたらどうしよう。でも、あんなに話しかけてくれるんだし、大丈夫だよな。そう、大丈夫に決まってるよ。楽しみだな。

ナレーション そして 1 週間後——。

浩 ただいま！ 母さん、手紙来てない？

母 なんですか、帰ってくるなり。来てるわよ、ラブレター、ほら。

浩 ありがとう。

効果音 (ドアを閉める音)

浩 (モノローグ) やった、ついに来た！ 泣いても笑っても、この中に答えがあるのだ。神様…。(手紙を封筒から取り出し開く音)

浩 (モノローグ) えーと。「中山君、お手紙ありがとう。(久美子の声で) 突然だったので、びっくりしました。中山君がわたしのことをそんなに思ってくれているなんて考えてもみなかったし、返事もなんて書いていいのか迷いました。でも、今のわたしには、男の子とお付き合いするなんて考えられません。わたしの友達なんかでお付き合いをしている人いるけど、わたしにはピンとこないのです。それにわたしには今、「いいなあ」と思っている人がいるのです。あまりいい返事でなくてごめんなさい。いつまでもいいお友達でいてください。」  
(浩の声で) なんでだよ。あんなに僕と楽しそうに話してくれたじゃないか。数学の答えだって教えてくれたじゃないか。僕がこんなに好きなのに、愛しているのに、ほかに思っている人がいるって？ どうして、僕のどこがいけないんだよ！ 何が「いい友達でいてください」だ。結局断ってるじゃないか。だったらもっとはっきり言えばいいじゃないか！

兄 豊 浩、ご飯だよ。早く起きろ。

浩 食べないよ。

豊 何を怒ってるんだ？ ははあ、さてはフラれたな。

浩 うるさいな。ほっとしてくれよ。

豊 でも、どうして怒ってるんだ？

浩 いいじゃないか、どうしてだって。早くあっちへ行っよ。

豊 どういう手紙だったか知らないけど、怒るってのはおかしいぞ。好きなんだか嫌いなんだか分からないじゃないか。

浩 いいんだよ、もう。

豊 よくないよ。でもな、今度のことはお前にとっても大事なことだ。フラれたからって相手を恨んでみて、それで終わりにしないことだ。いいか、浩。自分の気持ちを正直に見つめてごらん。“自分がそんなに怒っているのは、どうしてなのか”って。お前の心の中に、“おれは大丈夫。きっとあの子も好きだって言ってくれる”っていううぬぼれがあったんじゃないのかい？

浩 …兄貴、どうして分かったんだ？

豊 そこは同じ血のつながった兄弟だもんな。実はね、僕にも経験があるんだ。高 1 の時だったよ。部活で一緒だった子が本当に好きだったんだけど、もう一人、その子を好きなのがいる、そいつが、対して出来のよくない、うだつの上からないやつだったんだ。絶対僕のほうを彼女は好きだと思っていたんだ。

浩                   それが、やっぱしそうじゃなかったってわけ？

豊                   うん。何もかもやんなって、1週間、学校行かなかった。その時だよ、ふっと小さいころ行っていた教会思い出して、行ったのは。教会の先生がさ、じっと話を聞いてくれてさ。僕が気づかなかった自分の心の中を手取るように教えてくれたんだ。「その自尊心、うぬぼれ、“罪の心”をなんとかしない限り、君の失恋ショックは直らないね」って。

浩                   ふーん。罪の、心か…。

豊                   そう。さ、浩、元気出せよ。大好きなアップルパイ買ってきてやっから。明日、お前も教会行ってみよう。

ナレーション     浩君は、なんだかちよっぴり目の前が明るくなりました。そして、アップルパイを思っ、おなかの虫が鳴るのを感じていました——。

<完>